



埼玉県のマスコット コバトン

Lib. Letter

2015 Summer [5～8月]季刊

平成27年5月23日 通巻 第40号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

関東武士の鑑、畠山重忠に迫る！

開催期間 : 平成27年5月23日(土)～8月2日(日)

場 所 : 埼玉県立熊谷図書館2階ロビー

今から850年ほど前に畠山重忠は、男衾郡畠山(深谷市畠山)で生まれたと考えられています。時代はまさに平氏の全盛であり、源平合戦の最初期では重忠は平氏方として戦います。

しかし、源頼朝が武蔵に入るのを機に頼朝に服属し、以後源氏方として源平合戦の中の様々な戦で活躍していくのです。

この展示では「畠山重忠」の人物に迫る資料を中心に、重忠が活躍した源平合戦やその時代に関する資料、重忠にゆかりのある史跡や人物に関する資料を展示します。畠山重忠を知ること、語られることの多い源義経や源頼朝とは異なる視点から平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてを見直せるため、新たな発見があるかもしれません。

なお、この資料展は、嵐山史跡の博物館の常設展示『畠山重忠と菅谷館跡・戦国時代の城郭・中世の祈り』の関連展示として開催するものです。畠山重忠に興味を持たれた方は、ぜひ嵐山史跡の博物館にも足を運んでみてはいかがでしょうか？

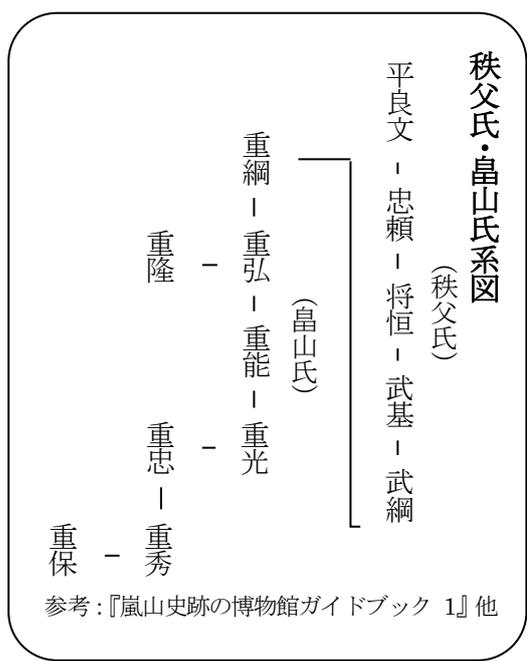
1 畠山重忠の実像

【生まれ】

畠山重忠は、長寛2年(1164年)、武蔵国の畠山重能(しげよし)の子として誕生しました。母は、相模国の三浦義明の娘です。畠山氏は、桓武平氏の流れを汲む秩父氏の一族で、秩父氏は平安時代中期頃から現在の秩父市一帯を本拠として秩父盆地を開いた豪族でした。

特に秩父重隆は、源義賢と組み、更なる勢力拡大をはかりましたが、嵐山町大蔵を舞台とした大蔵合戦で、源義朝の軍勢に敗れます。以後秩父氏をはじめとする武蔵の武士団は、源義朝の配下に入り、保元の乱や、平氏の乱においては源氏方として戦います。

しかし、平氏の乱(1159年)では、平清盛に源義朝が敗れてしまうため、武蔵武士の多



くは平氏の支配下と置かれることになりました。その戦いから5年後に重忠は生れます。

治承4年(1180年)8月、源頼朝が平氏打倒を掲げ挙兵しますが、平治の乱以後、平氏に仕えてきた畠山氏の選択として、平氏に味方した重忠は河越氏らとともに、源氏に味方した相模国の三浦氏の居城・衣笠城を攻撃し落城させました。

頼朝は石橋山の合戦に破れたため、一度安房国に逃れましたが、その地方の武士団が頼朝に味方し、同年10月には再び武蔵国に入るまでに勢力を回復させます。そして武蔵武士に対し、帰属を呼びかけ、10月4日、重忠は一族の河越重頼・江戸重長とともに頼朝に従うことに決意しました。こうして頼朝の下で源平合戦を戦い抜き、鎌倉幕府に仕え、頼朝の右腕として手腕を発揮した重忠には、その人物をうかがえる話が数多く残っています。

【語られる重忠】

有名なエピソードの一つに、一の谷の戦いの際、「鶴越(ひよどりごえ)を重忠が愛馬三日月を背負って下りた。」というものがあります。この話は『源平盛衰記』に記されているのですが、他の書物である『吾妻鏡』や『平家物語』には、この話に関する記述がなく、これらの資料には「重忠の家臣・本田近常が平師盛を討ち取り、それが安田義定の手柄となった。」という記述があります。このことから、重忠は、「鶴越に向かった別働隊」では無く、「安田義定が率いる本隊」にいた可能性が高いため後世に作られた逸話だと考えられます。ただ、このような話が創作されるのも、重忠の怪力と優しさがあってのことだと考えられます。

~~~~~文化的な才能♪~~~~~

重忠の数々の活躍の中には、重忠の文化的な才能も垣間見ることができます。

静御前が鶴岡八幡宮で舞を披露した際に、舞の伴奏は御家人の中で楽器を演奏できる人がつとめ、重忠は銅拍子という楽器を演奏します。

また、当時は今様という歌謡が流行しており、重忠は見事に歌えたようです。

~~~~~

また、重忠が管理を任されていた沼田御厨(ぬまたのみくりや)で問題が起こり、責任を問われた重忠は、囚人として千葉胤正(ちばたねまさ)に預かりの身となります。沼田御厨は重忠が管理を任されていたが、実際には代官を派遣し管理していました。しかし、その代官が問題を起こしてしまうのです。責任者として幕府に呼び出された重忠は謝罪しますが、囚人扱いとなります。預かりの身となった重忠は胤正の屋敷で食事もとらず、眠らず、口もきかずに、ただただ反省の意を示し、絶食して死を選ぶつもりでした。この様子を聞いた頼朝は感心してすぐに許した、といわれています。

### 【重忠の最期】

元久2年(1205)。鎌倉は、4月から不穏な空気が流れていたと『吾妻鏡』には記されています。そして事件が起きたのは、その2ヵ月後、6月のことでした。鎌倉で謀反が起こるとの騒ぎがあり、由比ヶ浜の様子を見に行った重忠の息子重保が、三浦義村の指揮により殺害されてしまったのです。『吾妻鏡』によれば、重保は6月20日に鎌倉入りしており、重忠も19日には、菅谷館を出て鎌倉に向かっていたが、二俣川まで来ていた重忠のもとに、重保が討たれ、さらに、自分を討つために北条氏の軍勢が向かってきていることが知らされたのでした。重忠勢は130騎程度でありましたが、菅谷館にもどらず、二俣川で幕府の軍勢を待ち受け、激闘の末重忠主従は討死、非業の死を遂げました。重忠は享年42歳でした。重忠も重保もなぜ、戦になったのか分からないまま戦い、討たれてしまったと思いますが、『吾妻鏡』には、二俣川に至る経緯が記されています。

前年の元久元年（1204）11月に畠山重保は、酒宴の席で平賀朝雅（ひらがあさまさ）と口論になります。このときは、同席した者たちがなだめたため、何ごともなく散会したと伝わっていますが、朝雅は、北条時政の後妻牧の方の娘婿でした。朝雅はこの口論をずっと恨みに思っており、重忠・重保親子の討伐を思いつき、北条時政を動かして、討伐を計画させます。当時の幕府の実権は、時政から息子の義時に移っていたため、時政は義時を説得します。最初は、「重忠は治承4年以来、ひたすら忠節を尽くしてきたので、右代将軍（源頼朝）はその志を鑑みられて、（頼朝の）子孫を護るよう、心を込めた御言葉を遺された者です。（中略）

——「誠実」「実直」畠山重忠——

沼田御厨（ぬまたのみくりや）の事件の際には「誠実さ」を貫き通し、頼朝に感心され、事なきを得、その後も頼朝の右腕として信頼された、畠山重忠。  
その重忠の誠実さは、明治天皇の命を受け、元田永孚総括のもとに編集された勅撰の修身書『幼学綱要』の「誠実」の例話の中に、「後三条天皇」や「加藤清正」とともに、紹介されています。（『幼学綱要 口語全訳』p203）

もし度重なる勲功を心にとめず、軽率に誅殺すれば、きっと後悔するでしょう。罪を犯したか否か真偽を糺した後に処置したとしても、遅くないでしょう。」（『吾妻鏡 現代語訳 7 頼家と実朝』より）と義時は反対しますが、結局は討伐に賛同し、重忠父子を討ちました。しかし、義時は重忠の軍勢の少人数でとても謀反など起こすことはできなかった、と判断し、重忠の死後に、北条時政と後妻牧の方を失脚させ、一度は没収した所領を重忠の未亡人に安堵（土地の所有権などを、幕府が公認すること）しています。この小テーマでは、重忠の人物について記述のある資料を中心に展示しています。

このコーナーの展示資料

【図書資料】

- 『日本の名著 9』（伊藤整／〔ほか〕編集 中央公論社 1974）[081/-/]
- 『幼学綱要 元田永孚／著 厚生閣 1935』[159.5/ヨウ]
- 『大日本史料 第4編之8』（東京大学史料編纂所／編纂 東京大学出版会 1981）[210.088/タイ]
- 『源義経一の谷合戦の謎』（梅村伸雄／著 新人物往来社 1989）[210.39/ミ]
- 『中世都市鎌倉の実像と境界』（五味文彦編 高志書院 2004）[213.7/チユ]
- 『畠山重忠』（畑やわら／編著 滴翠社 1977）[289.1/H41/]
- 『菅谷古城主畠山重忠君史輯正編』（山岸章佑／著 山岸宗朋 1995）[289.1/ハ]
- 『畠山重忠（人物叢書 新装版）』（貫達人／著 吉川弘文館 1987）[289.1/ハ]
- 『畠山重忠公の血脈』（宮之原研／著 宮之原研 1988）[289.1/ハ]
- 『日本芸能史 第2巻』（芸能史研究会／編 法政大学出版局 1982）[772.1/-/] 【久喜図書館所蔵】
- 『今様のこころとことば』（馬場光子／著 三弥井書店 1987）[911.63/イ] 【久喜図書館所蔵】
- 『日本の家紋 続（カラーブックス 345）』（辻合喜代太郎／著 保育社 1975）[B288.6/-/]
- 『新編埼玉県史 通史編 2』（埼玉県／編 埼玉県 1988）[S201/シ]
- 『戦い・祈り・人々のくらし』（長島喜平／監修 嵐山町 1997）[S233/ヲ]
- 『畠山重忠（シリーズ・中世関東武士の研究 第7巻）』（清水亮／編著 戎光祥出版 2012）[S288.3/ハ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『栗津原合戦 畠山重忠・勇婦巴女』（楊洲周延／〔画〕 東京 長谷川常二郎 1894）[S289/ハ] 【埼玉資料・禁帯出】

- 『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』  
 (清水寿／著 清水寿 1994) [S289/ハ]
- 『鎌倉武士の典型畠山重忠 (人物研究叢刊 16)』  
 (野口静雄／著 [埼玉県立浦和図書館 (製作)] [1994]) [S289/ハ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『少年武士の鑑畠山重忠』  
 (荻窪留吉／著 [埼玉県立浦和図書館 (製作)] [1994]) [S289/ハ]
- 『畠山重忠』  
 (栗原勇／著 [埼玉県立浦和図書館 (製作)] [1994]) [S289/ハ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『畠山重忠と菅谷館址 (比企の自然と文化財シリーズ)』  
 (比企の自然と文化財を守る会／編 比企の自然と文化財を守る会 1972) [S289/ハ]
- 『畠山重忠物語 (埼玉県人物誌シリーズ 4)』  
 (下山懋／著 埼玉県立文化会館 1957) [S289/ハ]
- 『武士の亀鑑人格の権化畠山重忠公』  
 (栗原勇／述 [埼玉県立浦和図書館 (製作)] [1994]) [S289/ハ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『畠山重忠』(横浜市歴史博物館／編 横浜市ふるさと歴史財団 2012) [S289/ハタ]
- 『畠山重忠 (資料館ガイドブック 13)』(埼玉県立歴史資料館 2002) [S289/ハタ]
- 『畠山重忠一代記』(福島茂徳／著 川本町教育委員会 2001) [289/ハタ]
- 『シンポジウム秩父平氏畠山重忠とその時代』  
 (中世文化財を活用した地域連携事業実行委員会 2010) [289/ハタ]
- 『菅谷館の主 畠山重忠 (嵐山史跡の博物館ガイドブック 1)』  
 (埼玉県立嵐山史跡の博物館 2011) [289/ハタ]
- 『秩父平氏の盛衰』  
 (埼玉県立嵐山史跡の博物館／編 勉誠出版 2012) [S289/ハタ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『名は惜しめども』(北澤繁樹／著 さきたま出版会 2014) [913/キタ] 【埼玉資料・禁帯出】
- 『大日本史 82』  
 (徳川光圀／修, 徳川綱条／校, 徳川治保／重校 徳川斉昭 1851) [ア 210.1/ト] 【禁帯出】
- 『梁塵秘抄 (岩波文庫)』(佐佐木信綱／校訂 岩波書店 1974) [カ 911.6/リ] 【禁帯出】
- 【雑誌資料】  
 『歴史研究 2014年3月』
- 【視聴覚資料】  
 『大利根音頭／西川峰子. 重忠節／畑やわら、西川峰子 (歌) (1)』(ビクター) 【レコード】

## 2 活躍した時代

重忠が生まれ、活躍し、そして非業の死を遂げる平安時代末期から、鎌倉時代初期にかけてはどのような時代だったのでしょうか。

### 【平氏の時代】

保元元年(1156)・平治元年(1159)の二度の戦乱の結果、平氏一門は、恩賞によって莫大な富を得るとともに、全国規模で組織された家人武士団の武力を基盤に、平安時代末期の朝廷権力を担うに至ります。そして治承元年(1177)の鹿ヶ谷事件を契機にそれまで政治的に協力関係を築いてきた後白河法皇と対立し、治承3年(1179)に後白河法皇自身を鳥羽殿に幽閉し、朝廷の政治は事実上清盛の専権に委ねられるようになりました。

そして治承4年(1180)2月に清盛の女徳子の産んだ言仁親王が天皇に即位した(安徳天皇)ため、平氏は天皇外戚の地位を獲得し、ここに平氏一門の独裁体制が確立します。もはや平家に歯向かうものなどいないと思われましたが、一人の天皇家の人物が反旗を翻します。その人物とは、後白河法皇の第三皇子以仁王(もちひとおう)で、治承4年(1180)4月に源氏を中心とする諸国に挙兵を命じる令旨を發しますが、

以仁王の謀反は発覚し、討たれてしまいます。

### 【源氏の挙兵】

しかし、東国では、以仁王の令旨にこたえ源頼朝が8月に挙兵します。その後、一度は石橋山の合戦で敗れるも、房総半島の武士団を傘下に加え、武蔵では、武蔵武士団を傘下に加えた頼朝は10月6日に重忠を先陣にして相模国に入ります。その後、平氏の追討軍と甲斐源氏の戦いである、富士川合戦、頼朝が佐竹氏を攻める金砂城合戦を経て、頼朝の「関東小幕府」の支配領域が確保されます。

翌年(1181)2月に清盛が病に没し、3月源平両軍の衝突である墨俣の戦いが生じ源氏は敗北します。しかし、北陸道で活躍していた源義仲の快進撃により、平氏はついに都落ちし、義仲軍が入京します。そして、平氏を追討する形で義仲は水島合戦を行います。合戦に破れ徐々に義仲軍は解体、また、後白河法皇とも対立してしまったため宇治川の戦いをもって義仲は滅亡します。義仲が滅亡した後は頼朝の軍勢は平氏追討を続け、有名な一ノ谷合戦を経て、屋島の戦いを勝利します。壇ノ浦の戦いで源平合戦に終止符を打ち、平氏一族を滅亡させます。

### 【鎌倉幕府の成立】

平氏が滅びた後、頼朝は守護・地頭の設置を認められ、実質的な幕府の運営に着手していきませんが、幕府が成立した当初は家臣内での権力争いが活発で、重忠の周辺でも、河越重頼や比企氏一族が殺されています。また、頼朝と義経の確執も明確なものとなり、奥州合戦をもって義経を匿った奥州藤原氏ともども討ち滅ぼしました。こうして鎌倉幕府の体制は磐石なものとなり、頼朝が死去する正治元年

(1199)までは、比較的安定した時代といえるでしょう。しかし、頼朝が亡くなったことで幕府内では再び権力争いが起こり、その権力争いの中で重忠も死を迎えることになるのです。この小テーマでは、重忠の活躍した平安時代末期から、鎌倉時代初期に関する資料を展示しています。

～重忠が生きた

時代の略年表～

- 1164 畠山重忠誕生
- 1177 鹿ヶ谷事件
- 1179 後白河法皇幽閉
- 1180 平氏全盛
- 1180.4 以仁王の令旨発令
- 1180.5 以仁王敗死
- 1180.8 源頼朝挙兵  
石橋山合戦
- 1180.9 木曾義仲挙兵
- 1180.10 富士川の合戦
- 1181.2 平清盛死去
- 1181.3 墨俣の戦い
- 1183.10 水島合戦
- 1184.1 義仲滅亡
- 1184.2 一ノ谷の戦い
- 1185.2 屋島の戦い
- 1185.3 壇ノ浦の戦い  
平氏滅亡
- 1188 奥州合戦
- 1199 頼朝死去
- 1205 重忠死去

(参考:『源平の争乱』

『頼朝の天下草創』ほか)

### このコーナーの展示資料

#### 【図書資料】

- 『日本古典全集 [4-49]』(現代思潮社 1983) [081/-/]
- 『日本古典全集 [4-50]』(現代思潮社 1983) [081/-/]
- 『堂々日本史 第4巻』(NHK取材班/編 KTC中央出版 1977) [210.04/トリ/]
- 『改定史籍集覧 編外 4』(近藤瓶城/編 臨川書店 1984) [210.08/カ/]
- 『愚管抄』(慈円/著 いてふ本刊行会 1953) [210.1/J48/]
- 『日本の時代史 8』(石上英一/〔ほか〕編 吉川弘文館 2003) [210.1/-ホ/]
- 『日本の歴史 第09巻』(講談社 2001) [210.1/-ホ/]
- 『戦争の日本史 6』(吉川弘文館 2007) [210.19/セン/]
- 『源平時代人物関係写真集』(志村有弘/解説・撮影 勉誠社 1998) [210.38/ケン/]
- 『源平争乱と平家物語』(上横手雅敬/著 角川書店 2001) [210.38/ケン/]
- 『源平合戦の虚像を剥ぐ』(川合康/著 講談社 1996) [210.39/ケ/]
- 『源平の争乱』(安田元久/著 筑摩書房 1966) [210.39/ケ/]

- 『源平合戦事典』(福田豊彦／編 吉川弘文館 2006) [210.39/ケン]  
 『鎌倉合戦物語』(笹間良彦／著 雄山閣出版 2001) [210.4/カマ]  
 『吾妻鏡 1』(五味文彦／編 吉川弘文館 2007) [210.42/アス]  
 『吾妻鏡 7』(五味文彦／編 吉川弘文館 2009) [210.42/アス]  
 『吾妻鏡事典』(佐藤和彦／編 東京堂出版 2007) [210.42/アス]  
 『北条氏と鎌倉幕府 (講談社選書メチエ 493)』  
 (細川重男／著 講談社 2011) [210.42/ホク]  
 『鎌倉源氏三代記 (歴史文化ライブラリー 299)』  
 (永井晋／著 吉川弘文館 2010) [288.3/カマ]  
 『日本古典文学大系 33』(岩波書店 1960) [918/=] 【久喜図書館所蔵】  
 『日本古典文学大系 32』(岩波書店 1959) [918/=] 【久喜図書館所蔵】  
 『源平盛衰記 卷第23・24』(茨城多左衛門 1796(寛政8)) [ア913.43/ゲ] 【禁帯出】
- 【雑誌資料】  
 『歴史と旅 1979年2月』【禁帯出】  
 『歴史人 2012年6月』【禁帯出】  
 『宝島. 別冊 1843 (2012年2月16日)』【禁帯出】

### 3 菅谷館跡

畠山重忠にゆかりのある史跡として有名なものの一つに、嵐山町にある、菅谷館跡があります。この菅谷館跡に関する記録としては、『吾妻鏡』の文治3年(1187)11月15日条には、身に覚えのない謀反の疑いから、「武蔵国菅谷館」に引き籠もり身の潔白を訴えたことが、元久2年(1205)6月日条には、6月19日に「小倉郡菅谷館」を出立したことが書かれています。

このことから、重忠が菅谷館を住居にしていたことが確認できますが、実は、現在私たちが目にする菅谷館跡は戦国時代の城郭であり、重忠の時代の菅谷館がどのような姿であったかについては分かっていません。しかし、菅谷館跡の南を流れる都幾川対岸の大蔵地区や、菅谷館跡から2kmほど西にある平沢寺など、重忠の祖である秩父平氏ゆかりの遺跡が周辺に点在しています。また、菅谷館跡に隣接する山王遺跡では重忠が生きていた時期の遺物が出土するなど、周辺遺跡の状況は菅谷館跡に重忠が居住していた可能性を示唆しているのです。

現在、菅谷館跡には、本資料展の関連展示先である常設展示『畠山重忠と菅谷館跡・戦国時代の城郭・中世の祈り』を行っている嵐山史跡の博物館が所在しています。

また、菅谷館跡以外にもゆかりのある史跡が埼玉県内外に多数あり、重忠が生まれたといわれる、深谷市畠山では、重忠が生まれたと伝わる畠山館跡や、重忠および家臣の墓と伝わる五輪塔があります。他にも青梅市にある武蔵御嶽神社には重忠が奉納したとされる赤糸威大鎧が、重保が討たれた鎌倉・由比ヶ浜近くには畠山重保を供養するためと伝わっている供養塔が建てられています。

この小テーマでは、重忠ゆかりの史跡である「菅谷館跡」を中心に、重忠の史跡・遺物に関する資料を展示しています。



芝居絵「壇浦兜軍記(3枚続きのうち中央部分)(重忠)」  
嵐山史跡の博物館蔵

#### このコーナーの展示資料

##### 【図書資料】

『日本城郭大系 5』(平井聖／〔ほか〕編修 新人物往来社 1979) [210.1/=]

『中世城郭の縄張と空間（城を極める）』（松岡進／著 吉川弘文館 2015）[210.4/チユ]

『鎌倉時代の馬と道』（馬事文化財団馬の博物館／編 馬事文化財団 2013）[210.42/カマ]

『中世都市鎌倉（講談社選書メチエ 49）』（河野真知郎／著 講談社 1995）[213.7/チ]

『遺跡発掘調査報告会発表要旨 第16回』（埼玉考古学会 1983）[S200.2/イ]

『研究紀要 第14号』（埼玉県立歴史資料館／編 埼玉県立歴史資料館 1992）[S200.5/サ]

『埼玉の館城跡』（埼玉県教育委員会／編 埼玉県教育委員会 1968）[S204/サ]

『埼玉の古城址』（中田正光／著 有峰書店新社 1983）[S204/サ]

『埼玉の中世城館』（埼玉県立玉川工業高等学校郷土研究部 1997）[S204/サ]

『城』（埼玉県立歴史資料館 2005）[S204/ソ]

『歴史資料館と菅谷館跡』（埼玉県立歴史資料館／編 埼玉県立歴史資料館 1993）[S204/ソ]

『遺物が語る中世の館と城』（埼玉県立嵐山史跡の博物館 2010）[S233/イ]

『菅谷館跡（嵐山史跡の博物館ガイドブック 2）』（埼玉県立嵐山史跡の博物館／編 埼玉県立嵐山史跡の博物館 2014）[S233/スカ]

『菅谷館跡のこと』（関根茂章／著 関根茂章 1975）[S239/セ]

『川本村文化財資料』（川本村郷土を知る会／編 武川村郷土を知る会 1976）[S259/カ]

『関東の城址を歩く』（西野博道／著 さきたま出版会 2001）[S290.2/カン]

『埼玉の城址めぐり』（西野博道編著 幹書房 2010）[S290.2/サ]

『武蔵武士と寺院（企画展）』（埼玉県立嵐山史跡の博物館 2006）[S204/ム]

『秩父ゆかりの畠山重忠公』（彦久保一光／著 彦久保一光 1993）[S289/ハ]

『畠山重忠辞典』（川本町教育委員会 2004）[289/ハ]

【埼玉資料・禁帯出】

『畠山重忠』（深谷市教育委員会 2012）[S289/ハ]

『畠山重忠と武蔵武士』（深谷市教育委員会 2012）[289/ハ]

## 4 重忠ゆかりの関東武士たち

9世紀以降、東国地域では治安が悪化していくため、武芸に秀でた貴族・王族が派遣されます。彼らは東国地域に土着し、その地方の有力者と婚姻・族縁関係を結び、勢力を築き上げていきます。同時に武芸者としての自覚を持ち、「兵の道」という独特の慣習・道徳を育んでいきます。そして11世紀における大開墾時代や、前九年・後三年合戦（1052～61・1083～87）への参戦を通して、東国各地でこうした組織が成長していき、その中に重忠を生んだ秩父平氏も含まれます。

よって、重忠には婚姻を通じて結ばれた姻族や古くからの従属武士団であった丹党と児玉党などゆかりのある武将は多くいました。また、秩父平氏の氏族では江戸、河越、中山の三氏は衣笠城攻めの際に軍勢を引きつれ参戦しています。一方、重忠の家臣としては、本田近常、榛沢成清が挙げられます。この二人は丹党に属しており、住まいも近い武蔵武士であり、戦では参謀役も勤めました。そして、元久2年6月22日の二俣川で重忠とともに戦い、最後をともにしたと伝わっています。他にも、沼田御厨で重忠の身柄を預かることになる千葉常胤や、重忠の義兄にあたる武蔵七党村山党の金子家忠や武蔵七党猪俣党の岡部忠澄などがいます。

この小テーマでは、このように重忠にゆかりのある人物やその人物が所属する武士団に関する資料を展示しています。

### このコーナーの展示資料

#### 【図書資料】

『歴史と旅 1996年6月号』

『多摩のあゆみ 第25号』

『坂東武士団の成立と発展 (戎光祥研究叢書 第1巻)』  
 (野口実/著 戎光祥出版 2013) [210.36/ハ/]  
 『中世の合戦と城郭 (高志書院選書 1)』  
 (峰岸純夫/著 高志書院 2009) [210.4/チ/]  
 『豊田武著作集 第6巻』(豊田武/著 吉川弘文館 1982) [210.4/ト/]  
 『中世東国武士団の研究』(野口実/著 高科書店 1994) [210.42/チ/]  
 『武蔵の武士団 (有隣新書 28)』(安田元久/著 有隣堂 1984) [210.42/ヤ/]  
 『武蔵武士』(渡辺世祐/著 有峰書店新社 1987) [213.4/W46/]  
 『東国武士と中世寺院』  
 (埼玉県立嵐山史跡の博物館/編 高志書院 2008) [213.4/トウ/]  
 『武蔵武士と戦乱の時代』(田代脩/著 さきたま出版会 2009) [213.4/ム/]  
 『実像の中世武士団』(高橋修編 高志書院 2010) [213/シ/]  
 『その後の東国武士団 (歴史文化ライブラリー 327)』  
 (関幸彦/著 吉川弘文館 2011) [213/リ/]  
 『東国における武士勢力の成立と展開 (思文閣史学叢書)』  
 (山本隆志/著 思文閣出版 2012) [213/トウ/]  
 『北武蔵の武将達』(柴崎利雄/著 柴崎利雄 2006) [S204/キタ/]  
 『誕生武蔵武士』(埼玉県立歴史と民俗の博物館 2009) [S204/タノ/]  
 『武蔵武士』(埼玉県立博物館 1983) [S204/ム/]  
 『武蔵武士』(福島正義/著 さきたま出版会 1990) [S204/ム/]  
 『武蔵武士の研究』  
 (福島正義/著 [福島正義先生還暦記念事業発起人] 1985) [S204/ム/]  
 『武蔵武士団の成立と展開』(松本雪雄/著 岡部町郷土文化会 1986) [S204/ム/]  
 『武蔵武士と寺院』(「武蔵武士と寺院」シンポジウム実行委員会 2007) [S204/ム/]  
 『武蔵武将伝』(稲垣史生/著 歴史図書社 1980) [S280/ム/]  
 『秩父平氏畠山重忠とその時代 (企画展)』  
 (埼玉県立嵐山史跡の博物館/編 埼玉県立嵐山史跡の博物館 2010) [S289/ハ/]  
 『中世武蔵人物伝』(埼玉県立歴史資料館/編 さきたま出版会 2006) [S280/チ/]  
 『河越氏の研究 (関東武士研究叢書 第2期 第4巻)』  
 (岡田清一/編 名著出版 2003) [288.3/カ/]

※展示資料とリストについて

このリストに掲載されている県立図書館資料は、展示期間中貸出ができません。

貸出は展示終了後から行います。予約・複写は一部資料を除きまして可能ですので、カウンターの職員にお尋ねください。

(資料名の後に【禁帯出】とついているものは貸出ができません。ご了承ください)

今回の資料展は、以下の常設展示と関連して実施しています。

- 常設展示：「畠山重忠と菅谷館跡・戦国時代の城郭・中世の祈り」
- 主催・会場：埼玉県立嵐山史跡の博物館（埼玉県比企郡嵐山町菅谷757）
- 期間：平成27年11月29日（日）まで
- お問い合わせ：嵐山史跡の博物館まで（TEL 0493-62-5896）

